

## 第18回(2013.10.07配信)

### 篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

#### 富士川の合戦と宇治川の合戦

どちらの戦いも有名ですから名前ぐらいは覚えている人も多いようですが、「歴男」や「歴女」でないかぎり、誰と誰が戦ったか、あるいはその歴史的な意義まで覚えている人は少ないようです。

「富士川の合戦」とは、治承(じしゆう)4年(1180)に平維盛(たいらのこれもり=清盛の孫)が源頼朝追討のため富士川において頼朝軍と戦った合戦で、この戦いに敗北した平家は大打撃を受け、平家没落の大きな要因となった戦いです。

「宇治川の合戦」とは、寿永3年(1184)に起きた源義仲(みなもとのよしなか=頼朝の従兄弟)と頼朝軍の戦いです。この戦いに敗れた義仲は京を追われました。どちらも頼朝の鎌倉幕府誕生には重要でかつ歴史に残る大きな戦でした。

治承4年(1180)、頼朝の挙兵を聞いた平清盛は、孫の平維盛を大将に、また弟の平忠度(たいらのただのり)を副将として派遣しましたが、鎌倉に向かう途中の頼朝軍と富士川で遭遇しました。このとき、平維盛軍は、水鳥の羽音を敵の鬨の声と間違えて敗走してしまいました。これによって、数では圧倒的だった平家軍が破れましたが、実際は武田太郎信義の軍が接近しており、水鳥の羽音で武田軍の夜襲を察知して退いたというのが本当のようです。武田信義は源氏の流れで、有名な「川中島平の合戦」で上杉謙信(うえすぎけんしん)と戦った武田信玄(たけだしんげん)の祖先です。また、一説によりますと、その年は近畿地方が大飢饉に見舞われて、平家軍の兵糧が不足しており、戦意が喪失していたともいわれています。

平維盛は学識と端麗な容姿から光源氏の再来かといわれました。また、平忠度は歌人としても有名でした。忠度の歌が『千載和歌集』に収められた経緯には有名なエピソードもありますが、JRが国鉄と呼ばれていた時代に、無賃乗車する人を「さつまのかみ」と呼んでいたといいます。平忠度の官職が薩摩守(さつまのかみ)だったから、さつまのかみ(薩摩守)=ただのり(忠度)という洒落です。

「宇治川の合戦」は、後白河法皇の院宣(いんせん=命令)を受けた頼朝が、弟の源範頼(みなもとののりより)と源義経を追討軍として派遣し、数万の軍勢でたった千人の義仲軍を宇治川で破った戦いです。ちなみに、先の富士川の戦い以降、頼朝自身は出陣せず、この二人を総大将として戦わせていました。この戦いで、藤原源太景季(かげすえ)と佐々木四郎高綱(たかつな)が宇治川を渡り先陣を争いましたが、名馬麿墨(するすみ)にまたがった景季に、主君頼朝から拝領した愛馬生喰(いけつき)にまたがった高綱は、「馬の腹帶がゆるんでおるぞ」と景季に声をかけ、景季の注意がそれた隙に追い抜いたと言われています。高綱は馬の足にからむ綱を断ち切り、宇治川の急流を渡って一番乗りしました。明治の名将乃木希典(のぎまれすけ)はこの高綱の後裔だそうです。

佐々木高綱は先陣をきったことで賞賛されましたが、小細工を弄した高綱に対する非難もあります。これを小細工とみるか、機転と受け止めるかは論議の分かれるところですが、その後の処遇をみれば、佐々木高綱の方が優遇されたようです。まあ「勝てば官軍」でしょう。「勝てば官軍、負ければ賊軍」とは、明治維新の際に官軍と称する連中に負けた幕府軍は賊軍と呼ばれたことからきた言葉ですが、江戸に乗り込んだ「官軍」と称する連中の横暴はあまり語られません。近年では、太平洋戦争後の戦勝国による「東京裁判」も、あまりにも不公平な裁判だといわ

れていますが、不幸にも誤解されて戦争犯にされた人の名誉回復にも日本政府は動こうとしません。つくづく戦争には負けたくないものですね。

### 逆落としと坂落とし

源義経の「鶴越(ひよどりごえ)の逆落とし」は有名ですが、源義仲の「俱利伽羅峠(くりからとうげ)の坂落とし」と言葉がよく似ていますから混乱しがちです。

寿永3年(1184)2月、都落ちした平家を追って源範頼、源義経兄弟の軍勢は一の谷において戦いますが、このとき義経は、搦め手(裏)の大将として一の谷に向かいました。途中、軍を二手に分けて、義経は自ら數十騎を引きつれ山の中を大きく迂回し、一の谷の裏山の険しい断崖に出ました。試しに二頭の馬を落としてみると、一頭は足を折ったがもう一頭は無事に降り立ったので、うまく手綱を取れば大丈夫だといって崖を駆け下り奇襲は成功したといわれています。この作戦は「鶴越の逆落とし」という有名な話で、この峠は現在の神戸に近いところですが正確な位置は不明です。

目印に「源氏の白旗」を付けた馬と、平氏の赤旗を付けた馬とを落としたら、赤い旗のほうの馬が足を折り、白い旗の方が無事に降り立ったので、大勝利間違いないといって攻撃したという話がありますが、『平家物語』には目印を付けたとは書いてありません。

当時の戦法としては、堂々と名乗りを上げて一騎打ちをするのが常識でしたが、義経は敵の背後から攻める戦法とか、騎馬武者の馬を弓矢で射る、あるいは軍船の漕ぎ手を射るなど、当時としては卑怯この上ない盜賊のような戦い方をしたという話もありますが、それは義経が幼いころに鞍馬山で育って武士としての教育がなされなかったから、しかたがないのだという人もいます。

寿永2年(1183)木曾冠者(きそのかんじや)源次郎義仲(みなもとのじろうよしなか、1154~1184)の軍と平維盛を大将とする平家軍とが加賀国と越中国の境にある砺波山で戦いました。このとき、俱利伽羅峠において、義仲は深夜に数百頭の牛の角に松明(たいまつ)をくくりつけて敵陣に追いやつたため、浮き足立った平家軍は峠の坂道を追い落とされ、崖から谷底に転落して壊滅したと『源平盛衰記』にあります。こういった戦法は中国の故事にもあるといいますから、この作戦が事実かどうか不明ですが、平家軍は10万の軍勢の大半を失い都に逃げ帰りました。大軍を失った平家は防戦のしようもなく西国に都落ちしました。

源平の戦いで最も重要な役割を果たしたのは源義仲でしょう。義仲は都の混乱を鎮めて皇居の安全を確保した功績で「旭將軍」と称され、征夷大將軍の称号を授かって平家追討を命じられましたが、その空きに逆賊にされてしまい、黙って殺されるのを待つわけにも行かず、頼朝の大軍とわずかな兵を率いて戦い、討たされました。

義仲は頼朝や義経の父である源義朝(よしとも)の弟義賢(よしかた)の子ですから、頼朝や義経には従兄弟に当たります。父の義賢は領地問題で悪源太(あくげんた)源義平(義朝の子・頼朝の兄)に討たれ、まだ幼かった義仲は信州の木曾で育ったので、通称木曾義仲と呼ばれました。

頼朝や義経は義仲に追われた敗軍の平家をたたいたのですが、義仲は健在だったころの平家軍を破ったのですから、その武勇は義経などとは比べようもありません。また、都での悪行も伝えられていますが、日本人の判官贊原が義経伝説を作り上げるために眞の英雄を悪者にしたものであろうともいわれています。

それにしても、後白河法皇はじめ公家たちの日和見主義的な言動に惑わされ続けた木曾義仲は気の毒です。こういった上役をもつ中間管理職の悲哀は昔も今も変わりないようですね。

(篠井純四郎)